

連載
第48回

福聚山史

池浦 泰憲
及川 一晋
編 文

「日本建築」の祖

辰野金吾（前編）

昨年（平成二十四年）十月、約五年をかけて進められてきた東京駅の保存・復元工事が完了した。震災などによって失われていた壮麗なドーム屋根や三階部分が復元され、建設当時の「赤レンガ」の駅舎がよみがえった。

大正三年（一九一四）、この東京駅の設計を手がけた人物が、当時の日本建築界の重鎮であった辰野金吾である。辰野金吾の墓所は常円寺にあり、今もその事蹟を讀えつつ墓参する参拝者が多い。

◆佐賀から東京へ

辰野金吾は嘉永七年（一八五四）八月二十二日、佐賀唐津藩の下級武士である姫松家の次男として生まれた。幼くして叔父である辰野家へと養子縁組された。唐津藩には十二の等級があったが、姫松家も辰野家も下から二つ目の等級で、生活は決して豊かではなかったという。明治三年（一八七〇）、金吾は唐津藩が開いた英語学校「耐恒寮」に入校する。この時、東太郎という教師が招かれたが、この東太郎とは後の総理大臣高橋是清である。廃藩置県により学校は廃校となり、東太郎は東京へ戻るが、東から大きな刺激を受けた金

吾をはじめ多くの教え子が上京した。上京後金吾は唐津藩出身で私塾を開いていた山口文次郎の下に身を寄せて学び、明治六年（一八七三）、工学寮（今の東京大学工学部）の官費生（寮に入り、国から衣服や食事が支給された）となった。工学寮への入学の際の金吾の成績は十人中最下位であったというが、卒業時には首席

となったという。金吾は工学寮で、後に

ともに日本の建築界をリードする、同郷

の曾禰達蔵ら

とともに「造家」（建築）

学科を専攻す

る。同学科で

は、イギリス人の建築家ジョサイア・コンドル（一八五二～一九二〇）の教えを受けた。明治初頭、日本政府は近代化に必要な都市を築くため、西洋建築の技術を得ようとし、い

わゆる「お雇い外国人」として、コンドルは招かれていた。コンドルは、ニコライ堂や鹿鳴館など多くの設計を手掛けるとともに、日本人建築家の育成に努め、「日本建築界の父」ともいわれている。辰野金吾はその教え子の



周囲の人は重厚な日本銀行の建物を評して金吾自身を「辰野堅固」と綽名した。

こうし

て金吾は、

西洋で学

んだ経験

と技術を

もって大

学の職に

就き、多

くの人材

を育てる

任にあた

った。そ

の中で手掛けた金吾の第一の代表的な建物が、

今も残る日本銀行本店である。この日本銀行

本店は、初めて日本人の建築家が設計すると

いう記念すべき国家的建築プロジェクトであ

った。本店の建物は、すでに明治十三年に、金

吾の師コンドルによって造られていたが、明

治政府は新たに西洋の国々に負けない中央銀

行を、日本人の手で造る方針を立てた。この

日本最初の西洋建築の大工事の設計監理に当

ったのである。

この工事にあたり、金吾は欧米の有名銀行

を見て回り、ベルギー、フランス、イギリス

第一期生にあたるのである。

◆海外留学から日本銀行建築へ

明治十三年（一八八〇）、金吾は学科一番の特権として、イギリスに海外留学する。のちフランスやイタリアを巡り、三年間の留学によって建築家としての土台を築いた。帰国後は師コンドルの後を継いで、三十歳で工部大学校（工学寮から改称）の最初の日本人教授となり、一時職を辞するものの、明治十九年（一八八六）帝国大学工科大学教授の職に就く。

◆「日本建築」の模索

ところで、金吾はロンドン留学の際に「日本の建築にはどのような歴史があるか」と聞かれて何も答えられず、自国の建築史研究の必要を感じたという。

明治十九年、金吾は「造家学会」（後の日本建築学会）の設立を果たした。一般的に学会」といえば、大学などの職に就くいわゆる研究者を主として組織されているものであったが、金吾はそうした研究者だけではなく、施工業者、建築家なども取り込んだ。金吾はそうした我が国独自の学会を構想し、実現したのである。

当時、日本において建築とは、まず近代化のために西洋から学ぶべき技術として捉えられ、その多くは西洋建築を踏襲したものであったが、その一方で、金吾は日本独自の建築という分野を確立すべく模索していたのである。

（続く）